



31
「主」

スマホを開くと、猫の写真が目に入った。懐かしい。
「ヌシ」だ。

かつて住んでいた街は、端的に言えば都会だった。便利で楽しく、僕は気ままにシテイライフを謳歌していた。人もモノもあふれ、孤独とは無縁に思えた。

けれど、コロナが流行り始めてから、そんな日常は変わっていった。街のざわめきが遠のき、この一室にひとり取り残されたような感覚が積み重なっていく。誰とも会わず、言葉を交わすことも少ない日々が続ぎ、それが次第に「普通」になっていった。そして気づけば、孤独にも慣れてしまっていた。

そんな生活の中で、ヌシに会うのは癒しだった。どこからともなく現れて、街角にふんわりと居る。体が特別大きいわけではないのに、どこか貫禄があって、この街の「地の者」であることが肌に刻まれているようだった。だから僕は親しみと敬意を込めて、街のあるじ——「主（ヌシ）」と呼んだのだ。

ヌシにはおそらく別の名前もある。前にスーパーの袋を提げたカップルに可愛がられているのを見かけた。名前のようなもので呼んでいるようだったが、はっきり聞き取れなかった。もう一度聞きたいと思ったけれど、盗み聞きしているみたいでやめた。やっぱりヌシはヌシだ。

昼に見かけると、たいてい腰をだらりと下ろしている。朝、出かけるときに「おはよう」と声をかけると、なんとなく挨拶らしい反応を返してくれることがある。目を細めてから伸びをする仕草を見たこともある。よく動物を、「人間で言えば〇〇歳」と例えることがあるが、又シは結構いってると思う。若くちょこまかした猫ではなく、どっしり構えた猫だ。

ある日、又シが珍しく僕の住むマンションの敷地内に入り込んでいた。エントランスを抜け、細い廊下の奥でちょこんと座っている。普段は外でくつろぐ姿しか見ていなかったから、少し驚いた。廊下は狭く、人が手足を広げれば「通せんぼ」できてしまうほどだ。なんだかいつもより薄暗く感じる。この見慣れない場所に入り込んで出られなくなっているのではないかと心配になった。

「よし、助けてあげよう」——静かに近づき、抱きかかえて外へ連れ出せばいつもの角まで連れて行けるだろうと考え、さらに一歩踏み出した瞬間、又シはさっと上体を起こして驚くほど軽やかにジャンプした。大人の胸の高さほどの小窓に向かってひと跳びに飛び、するすると外へ消えていった。僕はただ茫然と立ち尽くした。やはり又シは一枚も二枚も上手だった。

それから、道端で会えば声をかけ、ときどき写真を撮った。又シはいいモデルだ。何気ない風景に色を添えて

くれる。スマホのアルバムを開くと、その写真がふと顔を出して、昔の友人が手を振るようにこちらを呼ぶ。

最後に会ったのはいつだっただろう。挨拶もせず引越してしまっただけから、もう何年か経つ。地下鉄ですぐに行ける距離なのに、行かなくなってしまった。東京は広くて狭い。近いのに遠い。写真に写るあの横顔を眺めると、不思議と確信めいた気持ち湧いてくる。今日もどこかで又シは生きている、そんな気がするのだ。

また偶然に道端で会えたらいい。僕が帰ってきたら、又シがどこからともなくふんわりと現れて、いかにも当然のように「おかえり」と目で迎えてくれる。写真を閉じ、スマホを机に置くと、自分が何を想像しているのかと微かに笑ってしまった。たまにはあてもなく街角で座ってみようか。そんな気にさせる猫が、確かにあの街にいたのだ。